

ウイルス学とウイルス理論の解体

更新日 9月9日

ポリオ、麻疹、HIV、CMV、EBV、C型肝炎、エボラ出血熱、インフルエンザ、ジカ熱、そして今
コロナウイルスの存在は実証され、科学的に証明されているのか？

細菌、ウイルス、感染症、顧みられない熱帯病会議：

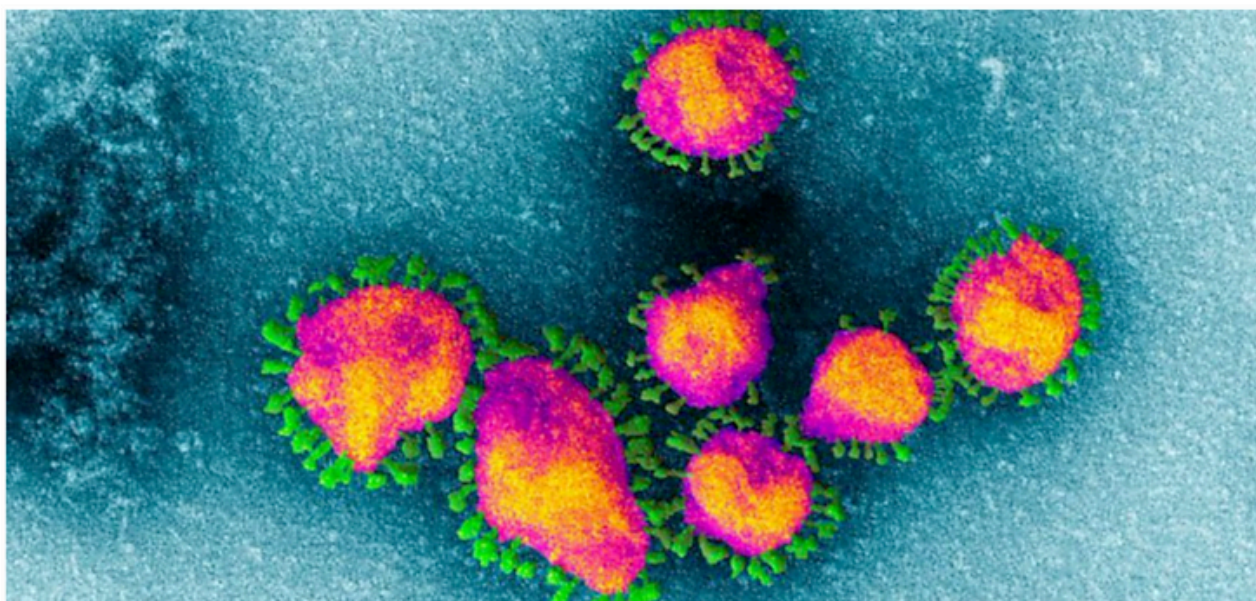
未来への挑戦 ドバイ、アラブ首長国連邦

2018 - 2019 - 2020

ロバート・O・ヤング博士の基調講演

ウイルス説の解体」 & 「重症急性呼吸器疾患あるいはSARSの発端は間質液にある」-2018年～
2020年

1892年、ロシアのバクテリア・ハンター、ディミトリ・イワノフスキが、病気にかかったタバコ
から液体を採取した。彼はこの液体をバクテリアを保持するのに十分な細さのフィルターに通し
たが、イワノフスキーが驚いたことに、バクテリアを含まない濾液は健康な植物を簡単に病気にし
てしまった。



A Micrograph of an aggregation of infected red blood cells with the phantom Coronavirus. These so-called infected cells are nothing more than biological transforming red blood cells that are going through pleomorphic changes due to increased acidity and a declining pH - <7.2. The biological transformation of blood or body cells is a natural process that takes place in an acidic environment of the interstitial fluids of the Interstitium compartments and then spilling over into the blood plasma via hydrostatic pressure caused by the buildup of dietary and metabolic acidic waste which has not been properly eliminated by the lymphatic system via the four channels of elimination - urination, defecation, perspiration and/or respiration.. <https://www.drrobertyoung.com/post/dismantling-the-viral-theory>

1898年、オランダの植物学者マルティヌス・ウィレム・バイエリンクがこの実験を繰り返し、目に見えない原因があることを突き止め、感染因子を "タバコ・モザイク・ウイルス" と命名した。Beijerinckの報告と同じ年、2人のドイツ人科学者が、牛の口蹄疫の原因となる濾過可能なウイルスを含む液体を精製した（ウイルスは一時「濾過可能なウイルス」と呼ばれていたが、やがて「濾

過可能」という言葉はウイルスにのみ適用されるようになり、使われなくなった)。ウォルター・リードが1901年に黄熱病の原因となる濾液を発見したのに続き、すぐに他の病気を引き起こすウイルスが何十種類も発見された。

History of Virology

- 1892 –Dmitri Iwanowski shows that extracts from diseased tobacco plants can transmit disease to other plants after passage through filters fine enough to retain the smallest known bacteria.
 - **This is generally recognized as the beginning of Virology!** But, nobody understood the significance until...
- 1898 – Beijerinck made the same discovery, but suggested that the pathogen is a distinct agent, not just really small bacteria



Dmitri Iwanowski
(1864-1920)



Martinus Beijerinck
(1851-1931)

1935年、もう一人のアメリカ人、ウェンデル・M・スタンリーは初心に戻り、タバコ・モザイク・ウイルスの純粋な結晶をろ過した液から作り出した。彼はこの結晶が容易に植物に感染することを確認し、ウイルスは塩のように結晶化しても感染力を維持できることから、生物ではないと結論づけた。

その後、世界中の細菌学者がウイルスをろ過するようになり、生物学の新しい分野、ウイルス学が誕生した。

歴史的に見ると、医学はウイルスが生きているかどうかという問題で揺れてきた。もともとは非生物であるとされていたが、現在は極めて複雑な分子、あるいは極めて単純な微生物であるとされ、通常は生命のサイクルを持つ寄生虫と呼ばれている。(ある種のウイルスワクチンには "殺す" という表現が使われ、ウイルスが生きているという公式見解が示されている)。

一般にDNAかRNAのコアにタンパク質が結合したもので、生殖能力を持たないウイルスは、複製を宿主に依存する。感染した生きた細胞の核酸を利用してタンパク質を複製し（つまり、宿主を騙してタンパク質を作らせ）、それを組み立てラインの車のように新しいウイルスに組み立てるのである。理論的には、これがウイルスが生き残り、新しい細胞や宿主に感染する唯一の手段である。

複製ウイルス説

その後、細菌が徐々に死滅し始めると、細菌は小さな、一見生命を持たない生存形態、いわゆる芽胞を作り出すことが発見された。

そして、この芽胞には毒性があり、いわゆる病原性毒物ではないかと疑われた。しかし、胞子は生命維持に必要な資源が回復すると急速にバクテリアに成長するため、これは否定された。

実験室の科学者たちが、弱く、高度に近親交配されたバクテリアが、芽胞よりもはるかに小さな構造体に変化しながら、あっという間に滅びていくのを観察したとき、バクテリアはウイルスと呼ばれる病原性の毒とされるものによって殺され、それによってウイルスが複製されているのだと最初は考えられた。



細菌ウイルスの発明

発見当時はまだ目に見えなかったこれらの構造が細菌を殺すと信じられていたため、ファージ／バクテリオファージ、すなわち「細菌を食べるもの」と呼ばれていた。

しかし後になって、高度に近親交配された、つまりほとんど生存不可能な細菌をファージに変えることができること、あるいは、芽胞を形成する暇がないほど急速に破壊される細菌をファージに変えることができることが判明した。

電子顕微鏡の導入は、細菌が突然死滅したり、高度に近親交配された細菌の代謝が「ファージ」の添加によって引き起こされたプロセスによって圧倒されたときに、細菌の生物学的変化や多形性から生じる構造を発見することにつながった。

また、見た目が異なる「ファージ」が何百種類も存在することも発見された。ファージ、いわゆる細菌の "ウイルス "が発見されたことで、ヒトと動物のウイルスが同じ姿をしていて、同じ構造をしているという間違っただけの思い込みと信念が強まった。いくつかの異なる理由から、これは事実ではないし、ありえない。

生物学に化学的検査技術が導入された後、ファージには何千もの種類があり、ある種類のファージは常に同じ構造を持っていることが発見された。

ファージは核酸からなる特定の分子で構成され、その分子は決められた数と組成のタンパク質の殻で覆われている。

試験管の中で高度に近親交配された細菌が、ファージと接触することによってファージそのものに変わることが発見されたのは後のことである。

この過程で、これらの「細菌ウイルス」は実際には他の細菌に重要な分子やタンパク質を提供する役割を果たしており、細菌そのものはそのような構造から生まれたことが発見された。

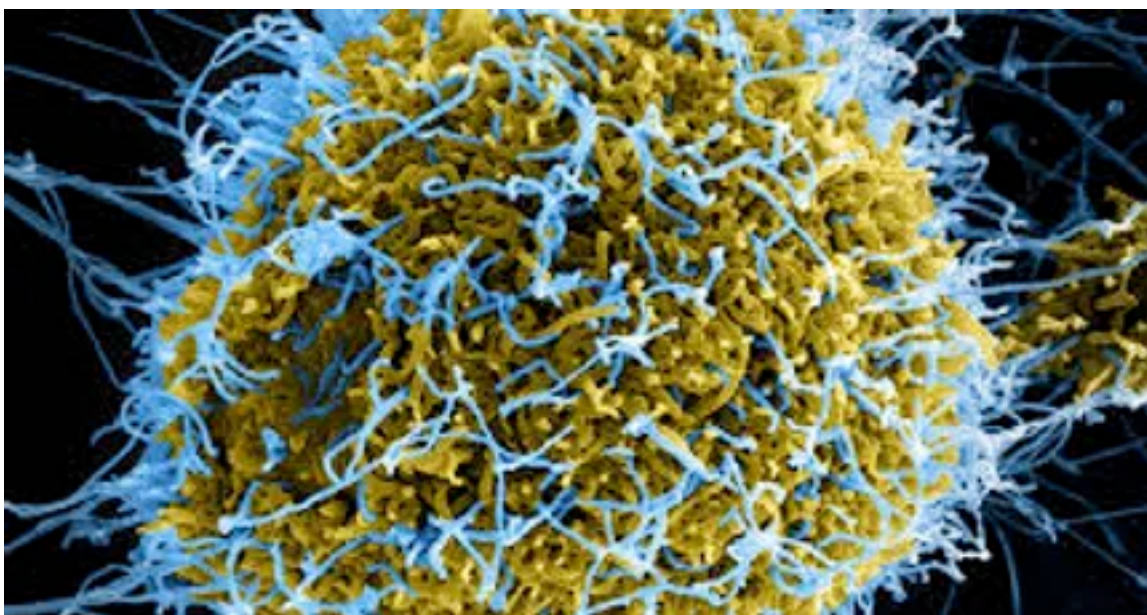
「細菌ウイルス」は自然の細菌を殺すことはできないが、その代わりに細菌の生存を助けていること、そして細菌自身がそのような構造から出現していることが立証される前に、これらの「ファージ」はすでにヒトや動物のウイルスとされるもののモデルとして使われていた。

ヒトや動物のウイルスは「ファージ」と同じように、細胞を殺し、それによって病気を引き起こし、同時に新しい病気の毒を作り出し、それによって病気を媒介すると考えられていた。

今日に至るまで、多くの新しい、あるいは新しいと思われる病気は、たとえその起源が不明であっても、あるいは認められていなくても、ウイルスに起因するとされてきた。

この反応は、「細菌ウイルス」の発見によって明らかに確認された。

戦闘と感染という理論が大多数の専門家に受け入れられ、高く評価されたのは、彼らが住んでいた国や地域が戦争や逆境に苦しんでいたときだけであったということに注目することは重要である。平和な時代には、他の概念が科学の世界を支配していた。



ドイツから始まった感染論がグローバル化したのは、政治的に利用された感染論に反対し反論していたユダヤ人研究者のほとんどがその地位から排除された第三帝国を通じてのみであったことに注目することは非常に重要である[273]。

ファージと生物学的形質転換の検出 - ファージの存在は迅速に証明できる

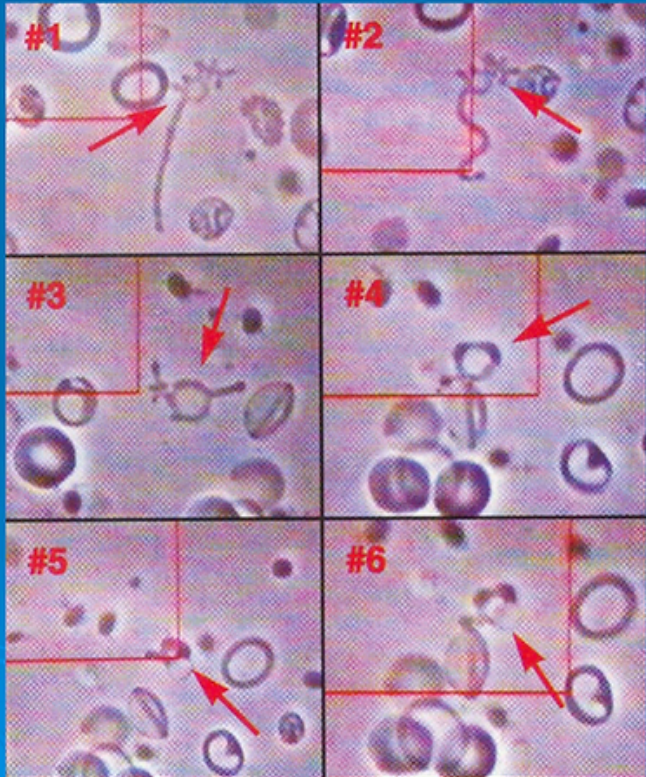
第一段階：ファージの存在は、バクテリアのファージへの変化や多形性という効果を通じて、またそれらのファージの電子顕微鏡写真を通じて確認されている。

対照実験では、細菌が変化しない場合、あるいは細菌がファージを形成することなく、外因的な突然の消滅によってランダムに分解し始める場合には、ファージは出現しないことが示された。

The Phenomenon Pleomorphism

EBV- Chronic Fatigue – Male 42

- The rapid evolution of matter into different forms across traditional taxonomic lines.
- Colloidal microzymas evolve intracellularly into more complex forms.
- First the primitive stage of filterable bacteria or the virus as a repair protein.
- Second are the cell-wall deficient forms and full bacteria.
- Third comprises of the yeast and/or fungus.
- And the culminate form of mold is the fourth stage.
- Collectively, I refer to all biological transmutations as EMPO or exotoxic/ mycotoxic producing organisms.
- EMPO excretions are all acidic and are called MAT, or microzymian acid toxin.



細菌は私たちの中で生まれ、私たちから生まれる。

細菌は細胞破壊の徴候であり、細胞破壊の原因ではない。

<iframe width="740" height="416" src="https://www.youtube.com/embed/aLa8BZFoie8" title="Do Germs Cause Disease?" frameborder="0" allow="accelerometer; autoplay; clipboard-write; encrypted-media; gyroscope; picture-in-picture; web-share" allowfullscreen></iframe>

第二段階：ファージを含む液体を濃縮し、試験管の底の濃度が高く、試験管の上の濃度が低い別の液体にかける。

次に、ファージを入れた試験管を強力に回転させ（遠心分離）、すべての粒子を質量と重量に応じてそれぞれの密度の場所に集める。

密度とは単位体積あたりの重量（質量）の比で、それぞれKg/lやg/mgで表される。同じ密度の粒子を集めて濃縮・精製することを密度勾配遠心法と呼ぶのはこのためである。

同じ密度の粒子が多く集まる層は "白濁" し、これを "バンド" と呼ぶ。このステップを記録し、濃縮、精製され、「バンド」に沈殿した粒子を注射針で取り除く。抽出された濃縮された量の粒子は、分離物と呼ばれる。

迅速で簡単な電子顕微鏡写真により、単離株中にファージが存在することが確認され、同時に、顕微鏡写真にファージ以外の粒子が写っていなければ、単離株の純度を示す指標となる。ファージの外観と直径もこの顕微鏡写真で確認する。

このステップで行われる対照実験は、ファージを形成しなかったバクテリアの液体を処理し、遠心分離することである。

ファージの単離に成功した後、ファージの生化学的特性解析が行われる。

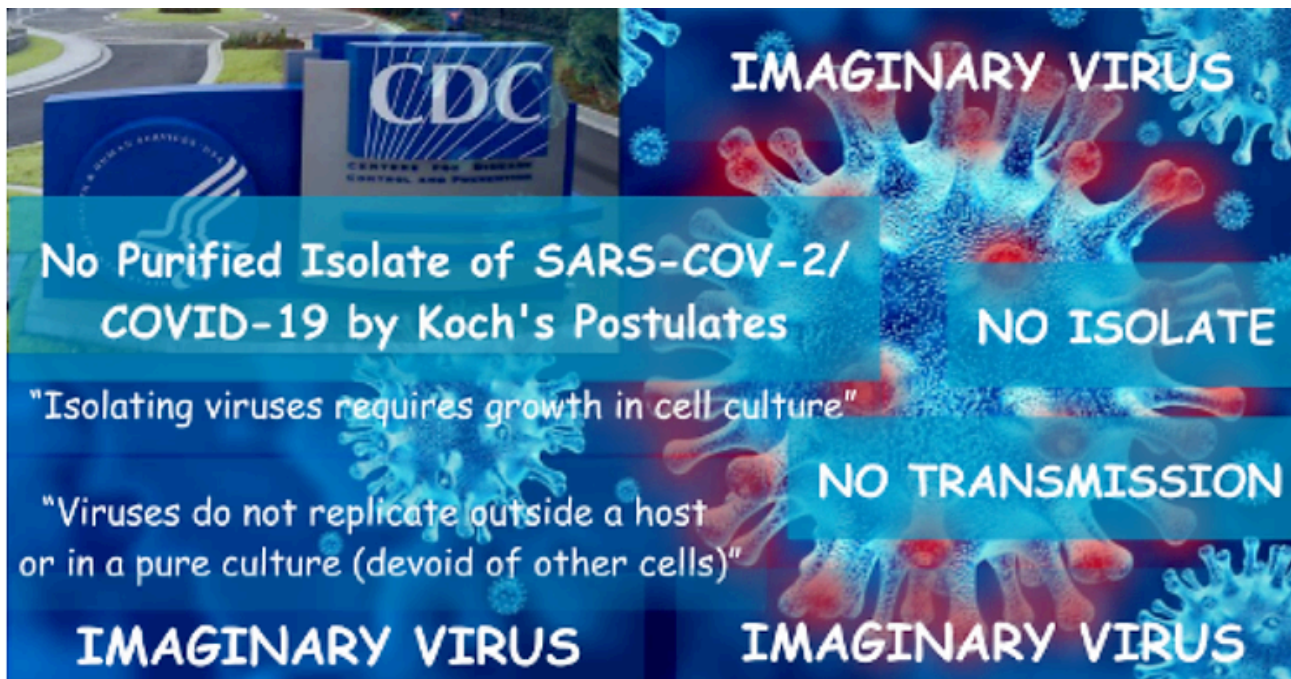
異なるタイプのファージはしばしば類似しているように見えるので、ファージの特定のタイプを特定するためには、その組成の生化学的特性評価が不可欠である。

密度勾配遠心分離で得られた分離物は、2つの部分に分けられる。一方は核酸のサイズ、種類、組成を測定するために使用され、もう一方は別の手順でファージのタンパク質の量、サイズ、形態を測定するために使用される。1970年代以来、これらの検査は、生物学を学ぶすべての学生が最初の学期に習う単純な標準技術となっている。

これらの検査はファージの生化学的な特徴を示すものである。ファージは非常に単純な構造をしており、分析が非常に容易であるため、ほとんどの場合、これらの結果は1つの出版物のみに掲載され、現在も掲載されている。

これらの試験の対照実験では、ファージを形成しないバクテリアの液体を使用しているため、生化学的な証明はできない。およそ2000種類のファージが存在することは、このようにして科学的に証明されている。

いわゆる病原性ウイルスは、人間にも動物にも自然界にも存在しない！



<https://www.drrobertyoung.com/post/there-is-no-evidence-of-the-existence-for-any-virus-isolated-by-anyone-anywhere-in-the-world> and <https://www.drrobertyoung.com/post/there-is-no-evidence-of-the-existence-for-any-virus-isolated-by-anyone-anywhere-in-the-world-1>

「バクテリオファージ」は、正しくはバクテリアの不完全なミニ胞子や構成要素として定義され、科学的に分離されている。一方、いわゆる病原性ウイルスは、ヒトや動物の体内や体液中で観察されたことはなく、分離され、その後生化学的に分析されたこともない。今日に至るまで、ウイルス学研究に携わる研究者の誰も、この非常に重要な点に気づいていないようである。

1945年以降、電子顕微鏡の使用と生化学は非常にゆっくりと正常な状態に戻りつつあったが、誰もヒトや動物から病原ウイルスが一度も分離されたことがないことに気づかなかったのである。

ジョン・フランクリン・エンダースは1897年、裕福な金融業者の家庭に生まれ、学業を終えた後、さまざまな社交クラブで活動した。その後、不動産業者として働き、4年間外国語を学んだ後、細菌ウイルス学に傾倒した。そして、この研究分野で学んだアイデアや概念を、ヒトの病原性ウイルスに転用したのである。

非科学的な実験と解釈がウイルス学を生んだ

エンダースの非科学的な実験と、陰性対照で確認したこともない解釈によって、「ウイルス性」感染症医学全体が行き詰まった。

ここで重要なことは、エンダースが多くの感染症専門家と同様、米軍で働いていたことである。化学兵器のほかに細菌やウイルスの形をした生物兵器が存在するという誤った考えを広めたのは、主に米軍であった。

1949 年、エンダースは、疑惑のポリオウイルスを体外で培養し、さまざまな組織で増殖させることに成功したと発表した。

アメリカの専門家の意見はすぐにすべてを信じた。エンダースのやったことは、滅菌したと主張する組織培養液にポリオ患者の体液を加え、ウイルスが原因で細胞が死滅し、このようにしてウイルスが複製され、それぞれの培養液からワクチンが採取できると主張したのである。当時、夏にはポリオの流行（ポリオ＝弛緩性麻痺）が頻繁に起こっており、その原因はポリオウイルスにあると考えられていた。

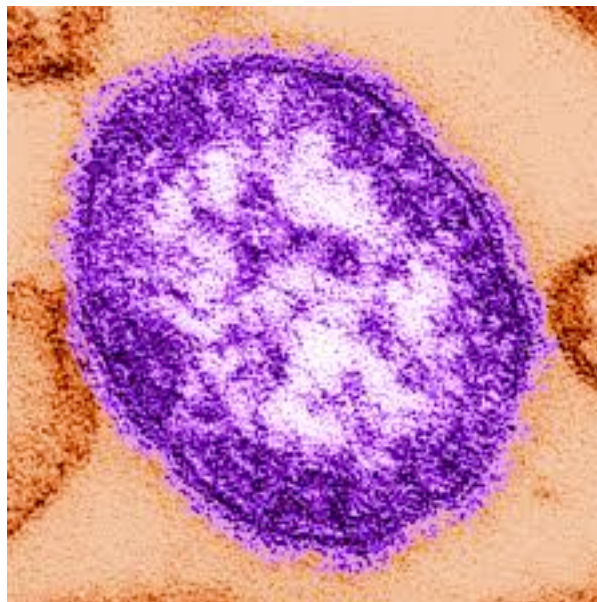
このウイルスを根絶するために、ワクチンが開発されたのである。ポリオワクチンが導入された後、症状は多発性硬化症、弛緩性急性麻痺、無菌性髄膜炎などと再診断され、後にポリオは根絶されたと主張されるようになった。

実験中、エンダースらは細菌が細胞を殺す可能性を排除するため、組織培養を滅菌した。

彼が考慮に入れなかったのは、感染の準備をする際の滅菌と細胞培養の処理こそが、細胞を破壊し、死滅させていたということである。その代わりに、彼は細胞病理学的効果を、いわゆるポリオウイルスの存在と作用と解釈した。

試験管内での "感染" 前の滅菌と細胞処理が細胞を死滅させていることを示すのに必要な陰性対照実験は、一度も行われていない。しかし、この「業績」に対してエンダースは1954年にノーベル賞を受賞した。

ポリオウイルスの発明と麻疹ウイルスの発明！
そして今、コロナウイルスの発明がある！



1954年は、エンダースが麻疹ウイルスを複製するために同じ技術を応用し、導入した年でもある。

同年、エンダースはポリオ・ウイルス疑惑でノーベル賞を受賞していたため、研究者たちは皆、エンダースの技術は科学的に有効だと信じていた。こうして今日に至るまで、ポリオと麻疹の概念全体が、この非科学的な技術と詐欺に基づいている。

さらに、ポリオと麻疹のワクチンにはウイルスが含まれているのではなく、死んだサルの腎臓組織や人間のがん細胞の粒子が含まれている。

これまでのところ、いわゆるポリオウイルスや麻疹ウイルスに関しても、陰性対照実験が行われたことはなく、細胞への細胞障害作用が実験室の手順によるものであることを示すことができたはずである。

さらに、エンダースらとそれに続く研究者たちが行った主張と実験はすべて、唯一の客観的な結論、つまり、実際には試験管内で細胞の粒子や断片とその活性を観察・分析し、これらを疑惑のポリオ・ウイルスや麻疹ウイルスの粒子や特性であると誤解していたという結論に導くものである。

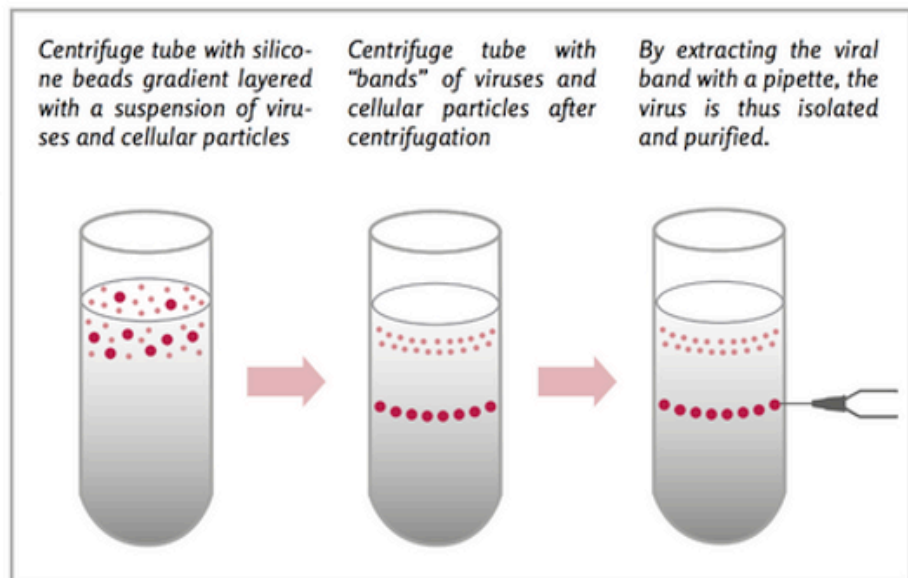
The density gradient centrifugation is the scientifically required standard technique for the demonstration of the existence of a virus.

Despite the fact that this method is described in all microbiology manuals as the "virus isolation technique", it is never applied in experiments meant to demonstrate the existence of pathogenic viruses.

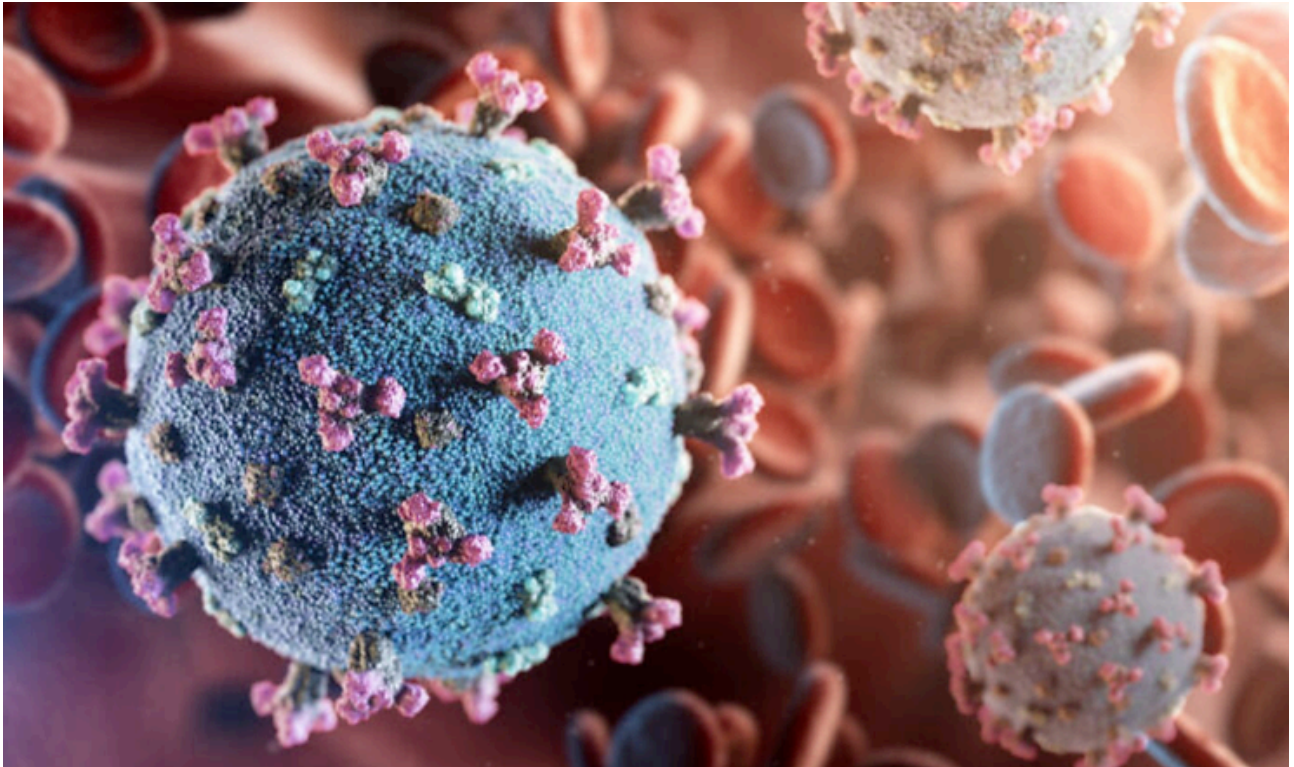
Centrifuge tube with silicone beads gradient layered with a suspension of viruses and cellular particles

Centrifuge tube with "bands" of viruses and cellular particles after centrifugation

By extracting the viral band with a pipette, the virus is thus isolated and purified.



HIV、EBV、CMV、C型肝炎、西ナイル・ウイルス、エボラ出血熱、麻疹、ジカ熱、そして今回のコロナウイルスに至るまで、すべてのウイルスは幻のウイルスである！



以下の説明は、いわゆる（ヒトや動物の）「病原性ウイルス」すべてに当てはまる。

麻疹ウイルスの存在を証明するものとしてバーデンス博士が「麻疹裁判」の過程で提出した6つの論文には、麻疹ウイルスの存在を信じるに至るまでの誤った解釈の連鎖の様々な段階が、教訓的に理想的な形で記述されている。

最初の論文は1954年にエンダースらによって発表された：「麻疹患者からの細胞病原体の組織培養における増殖」（Proc Soc Exp Biol Med. 1954 Jun; 86 (2)： 277-286).

この出版物は、麻疹の臨床試験で発表された他の出版物同様、インターネットで見ることができる。

その実験では、エンダースらは栄養液を大幅に減らし、感染したとされる液を入れる前に、細胞を破壊する抗生物質を細胞培養に加えた。

その結果、細胞が死滅し、麻疹ウイルスが分離されたと誤解されたのである。

抗生物質だけでなく、栄養素の欠乏が細胞障害作用につながった可能性を排除するための対照実験は行われなかった。

エンダースと彼の同僚たちの盲目ぶりは、戦後から冷戦の間に「ウイルスヒステリー」が激化していく中で、彼が本当に人々を助けたいと願っていたという事実によって説明することができる。

また、エンダースと彼の同僚の多くが医学や生化学の知識を持たず、最初の麻疹ワクチンの開発でソ連と競争していたという事実からも説明できる。

このような成功へのプレッシャーは、エンダースと彼の同僚たちが1954年に表明した自分たちの留保や注意を無視した理由も説明することができる。彼らは、多くの細胞も普通に（つまり「感染」させずに）処理された後に死亡することを観察・指摘していたが、それは未知のウイルスやその他の要因によって引き起こされたと考えていた。これらの事実と注意は、その後すべて無視された。

請求人が「麻疹の臨床試験」で発表した2番目の論文は1959年に発表され[274]、上記の理由から、著者らはエンダースによって導入された技術はあらゆるウイルスの分離には適切ではないと結論づけた。この反論は、他のすべての研究者によって議論されていないばかりか、完全に無視されている！

病原性ウイルスの「ウイルス・ドグマ」は今日でも推進されている！

3番目の論文[275]では、著者たちは細胞内の典型的な細胞粒子を撮影し、これを麻疹ウイルスと誤解した。彼らはウイルスを分離しなかった。

原因不明の理由で、彼らは別の実験でウイルスとして提示したものの生化学的構造を決定し、記述することができなかった。

使用した方法についての短い記述の中で、著者らはウイルスの標準的分離技術、すなわち密度勾配遠心分離を適用しなかったことが読み取れる。

彼らは試験管の底にある死んだ細胞の断片を遠心分離しただけで、その生化学的構造を説明することなく、細胞の残骸をウイルスと誤解したのである。

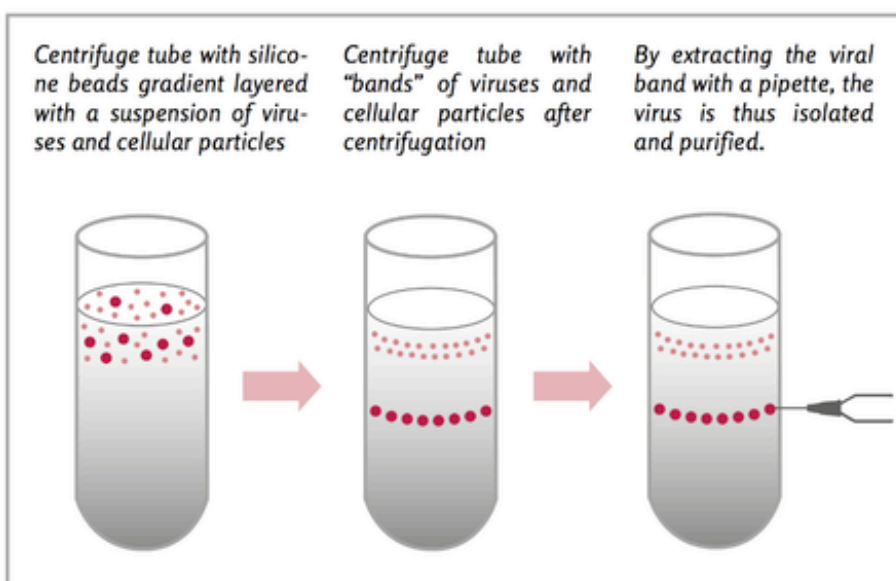
The density gradient centrifugation is the scientifically required standard technique for the demonstration of the existence of a virus.

Despite the fact that this method is described in all microbiology manuals as the "virus isolation technique", it is never applied in experiments meant to demonstrate the existence of pathogenic viruses.

Centrifuge tube with silicone beads gradient layered with a suspension of viruses and cellular particles

Centrifuge tube with "bands" of viruses and cellular particles after centrifugation

By extracting the viral band with a pipette, the virus is thus isolated and purified.



実験のやり方からすると、細胞粒子がウイルスと誤解されたと結論付けるしかない。

請求人が麻疹ウイルスの存在を証明するものとして提出した第4の出版物[276]と第6の出版物[277]にも同じ状況が見られる。

第5の出版物[278]は、死んだ細胞からどの核酸分子がいわゆるポリオウイルスや麻疹ウイルスのゲノムを表すかについてのコンセンサスプロセスを記述した総説である。

その結果、何十もの研究チームが細胞特異的な分子の短い断片を使って研究を行い、その後、与えられたモデルに従って、すべての断片を紙の上にまとめることになる。

ポリオ、麻疹、HIV、C型肝炎、エボラ出血熱、ジカ熱、コロナウイルスなどは、ヒトでも試験管でも見たことがない！

裁判所が選任した専門家は、この出版物に言及し、この出版物はゴールドスタンダード、すなわちウイルスゲノム全体について述べていると述べた。

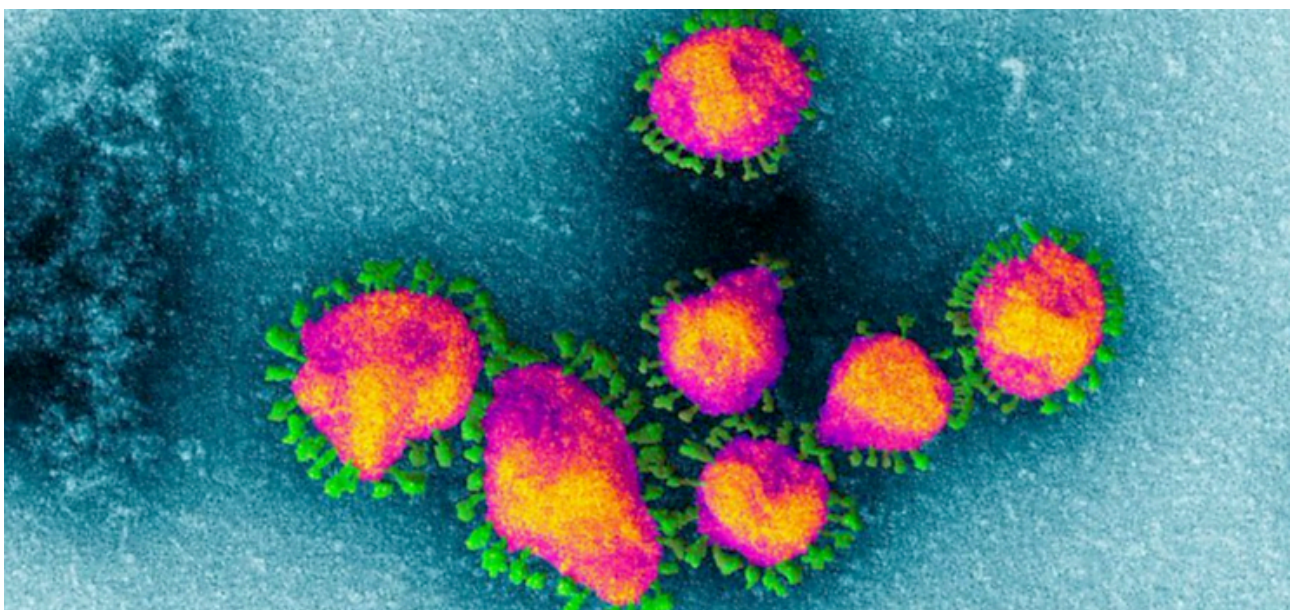
麻疹ウイルスゲノムの正確な分子構成と機能は、さらなる研究の対象でなければならないと述べている。

誰でも簡単に気がつくことは、これらの出版物全てにおいて、また「麻疹ウイルス」やHIV、EBV、CMV、エボラ出血熱、ジカ熱、コロナ熱を含む他の病原性ウイルスに関する他の出版物全てにおいて、対照実験が一度も行われていないことである。どの研究者も密度勾配遠心法を使わず、試験管の底にある細胞の残骸を遠心分離しただけである。

液体からすべての粒子を集めるために使われるこの技術は、ペレタイジングと呼ばれる。

論理的かつ科学的な観点から言えば、いわゆる「病原性ウイルス」に関するすべての出版物において、研究者たちは実際には粒子と細胞の特徴しか示していないと言える。

また、いわゆる巨大ウイルス[279]、すなわち核酸が包まれたウイルスは、海中や基本的な生物であればどこにでも存在することも指摘しておきたい。



他の細菌ファージと同様、それらは無害であるだけでなく、有益な機能を有している。ファージは密度勾配遠心法を用いて単離することもでき、その存在が証明されている（下図参照）。

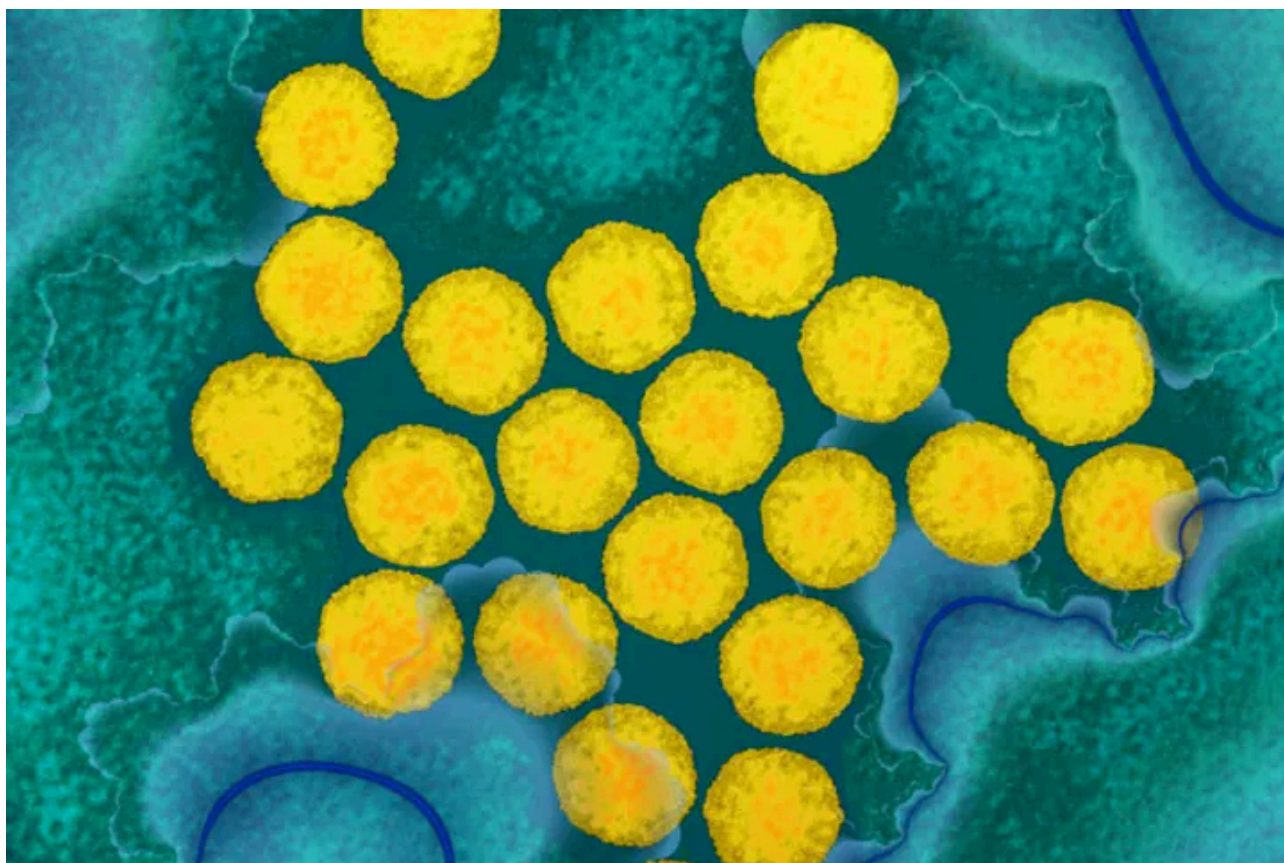
また、リュトケ教授の関連する総説（1999年）もお薦めである[280]。リュトケ教授は、ウイルス学が始まった当初、大多数のウイルス学者が常に、ウイルスと間違えていた構造は細胞の構成要素であることがわかったので、それらは実験の結果に過ぎず、観察された変化の原因ではなかったと結論づけたと述べている。

ファージが発見され、その特徴が明らかになった後、核酸がすべての細胞やウイルスのゲノムであるというドグマが導入され、そのようなウイルスは人間や動物にも存在するはずだというコンセンサスが生まれた。

1992年、核酸がすべての細胞の遺伝子型であるというドグマは科学界で撤回された。

しかし、病原性ウイルスの「ウイルス・ドグマ」は、今日もなお、何十億もの人々に害を及ぼす形で広まっている。- 何のために？

幻のウイルスとポリオ・麻疹ウイルスに関する結論



麻痺の症状を引き起こすことが科学的に証明されていない、いわゆるポリオ・ウイルスの電子顕微鏡写真。イラストは効果を高めるために着色されている。

私の結論は、環境（体内環境）がすべてであり、病原菌やいわゆるウイルスはまったく存在しないという真実である！

Who had their finger on the magic of life - antoine bechamp or louis pasteur?

Volume 2 Issue 5 - 2016

Robert O'Young

Universal Medical Imaging Group, USA

Correspondence: Robert O'Young, pH Miracle Inc., 16390 Del Sol Valley Center, California, 92082, USA, Tel 760 751 8321, Email pHmiracleliving@aol.com

Received: February 02, 2016 | **Published:** September 19, 2016

The magic eraser

There have been several notable occasions in history when persons offering invaluable contributions to the advancement of human understanding have been ignored, ridiculed and even persecuted in their time. In most cases, however, their work has subsequently been given a deserved measure of recognition. Some great ones, though, have not enjoyed such rejuvenation and have "suffered the slings" of obscurity.

So it is with Bechamp's.¹ Had the profound voice of his science not been silenced, much of humankind may have been spared the worst aspects of the infectious or vital stresses of the 20th century. Since the case can be made that the approved but improper and dangerous treatment of infectious "diseases" over the last century has in large part given rise to the present epidemic wave of degenerative "disease," including cancer, AIDS syndrome or Ebola, we might have been spared these miseries as well. At the least, we would have understood much more clearly why we have them. Fortunately, however, Bechamp's¹ work has been kept alive by small, successive bands of truth-seekers.

The adoption by science of Louis Pasteur's germ theory as the whole truth, without regard to the subtleties and deep insight of Bechamp's¹ microzymian principle, represents one paraphrased: "There is no medical doctrine as potentially dangerous as a partial truth implemented as whole truth." Any medical professional, bioscientist, health care practitioner, or lay person for that matter, who wishes to gain insight into the origins and nature of infectious and chronic illness, against the backdrop of a marvelous view of the life process, must consider Bechamp. And they must entertain one of the most important concepts to come out of his illustrious career-microbiological pleomorphism as it relates to disease and its symptoms.

There are four books written about him of which this writer is aware (although there are very likely more) and many works published by him. Of the ones by him, all except one are in the original French. Fortunately, his last book, *The Blood and Its Third Anatomical Element*, was translated into English in 1911 by Montague,² M.D., Ph.D., M.A., although it has been difficult to obtain. Of the two major books about him, one is in French and the other³ is also rare. The other two books about Bechamp¹ are by R.B. Pearson. *The Hume*² book, one Pearson book, and *The Blood* are once again available as reproductions in the U.S. after a hiatus of several years.

Bechamp¹ considered *The Blood* his crowning work, and therein he describes an amazing micro-anatomical entity and its participation in the clotting process. He also includes details of his work and his experiences with the plagiarisms and "pettifogging ratiocinations" of Louis Pasteur. The French book about him, which author Christopher⁴ praised highly to this writer, is by Marie Nonclercq, entitled *Bechamp*.¹ 1816-1908: L'Homme et le Savant, Originalité et Fécondité de Son Oeuvre. The latter part means, *The Man and the Scientist*, the

Originality and Productivity of His Work. According to Christopher,⁴ in an account given at a 1991 facts that did not set well with reigning theory, many questions arose... as I read essays and books, of a heretical nature, one could say, written by researchers whose names I never heard mentioned in my classes. Twenty years ago, the World Health Organization proudly declared recently the discovery that the single greatest factor in heart disease is a vitamin E deficiency.

Also perversely awe-inspiring is the fact that a person of Bechamp's¹ extraordinary accomplishments has been written out of history books, textbooks and all encyclopedias. It is sobering to consider the required degree of authoritarian control over key academic elements in our culture. It is not my intention to belabor the politics, but as the wonders of Bechamp's work unfold to the mind, the question simply arises, "Why is this not common knowledge?" Yet, we must be grateful that his "erasure" was far from complete.

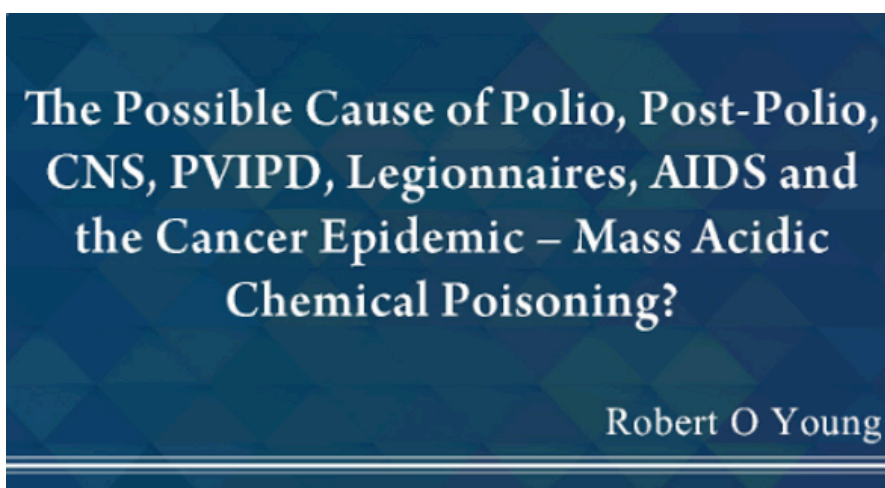
It is difficult to do full justice to Bechamp¹ without recourse to a book. His work was incessant and prodigious, and his observations prolific. I will attempt to convey some essentials of his biological work-only a part of the picture, as the total output includes chemistry, medicine and pharmacy. He left a remarkable legacy of scientific insight that borders on the spiritual, yet died in relative obscurity with virtually no recognition by peers or the public. Having outlived his wife, his beloved associate Professor Estor, and his four children, he had to endure those hard lessons of life in addition to the one of professional anonymity. However, in keeping with his extraordinary mind, he never lost conviction that the truth would come to light, as would his role in its revelation.

I'm not sure why, when his life touched mine through E. Bechamp is known among a coterie of modern and contemporary admirers, and his work has been followed up, knowingly or not, by perhaps a total of 50 scientists. This group includes such names as Gunther Enderlein; Wilhelm Reich; Royal Raymond Rife; the courageous Australian team of Kalokerinos et al.⁵ M.D. (who for many years published information in the *Toorak Times*, an Australian newspaper);

病原菌やウイルスと呼ばれるものは、体液の繊細なアルカリ性pHバランスの酸性とエネルギーの不均衡による細胞破壊の症状である可能性があるだけで、その破壊の原因ではない。だからこそ私は数年前、世界中の科学者に、コッホの定理を使ってHIVウイルスの存在を証明できれば、500万ドルの発見料を支払うと申し出たのである。

Koch vs Rivers	
<u>Koch (1884)</u>	<u>Rivers (1937)</u>
1. The microorganism found in the ill but not the healthy	1. Isolation of virus from diseased host
2. The microorganism must be isolated from a diseased organism and grown in pure culture.	2. Cultivation of virus in host cells
3. Produce same disease in host	3. Proof of filterability
4. Re-isolation of microorganism	4. Produce same disease in host
	5. Re-isolation of virus
	6. Detection of a specific immune response to virus

もう20年以上経つが、政治的な攻撃により賞金を支払う資金がなくなったにもかかわらず、私はまだ待っている！20年前に提示した500万ドルの賞金では、現在、何兆ドルもの報酬を支払っている医療ウイルスのドグマを変えるには不十分だったことは残念だ[281]。





ウイルス学、ウイルスとワクチンに関する主要な学術論文が査読付きで発表された。
ロバート・O・ヤング博士による

「ウイルス、ワクチン、HIV/AIDS仮説についての再考」-パート1、2、3

ロバート・O・ヤングCPT、MSc、DSc、PhD、自然療法家

受領 2016年01月01日 | 掲載 2016年6月20日

引用 Young RO (2016) Second Thoughts about Viruses, Vaccines, and the HIV/AIDS Hypothesis -
Part 1. Int J Vaccines Vaccin 2(3) : 00032. DOI: 10.15406/ijvv.2016.02.00032

Second thoughts about viruses, vaccines, and the HIV/ AIDS hypothesis - part I

Volume 2 Issue 3 - 2016

Robert O Young

Universal Medical Imaging Group, USA

Correspondence: Robert O Young, pH Miracle Inc., 16390 Dia del Sol, Valley Center, California, 92082, USA, Tel 760 751 8321, Email universalmedicalimaging@yahoo.com

Received: January 01, 2016 | Published: June 20, 2016

Viruses

"In the sciences, people quickly come to regard as their own personal property that which they have learned and had passed on to them at the universities and academics. If however, someone else now comes along with new ideas that contradict the Credo (that has been recited for years and passed on in turn to others) and in fact even threaten to overturn it, then all passions are raised against this threat and no method is left untried to suppress it. People resist it in every way possible: pretending not to have heard about it; speaking disparagingly of it, as if it were not even worth the effort of looking into the matter. And so a new truth can have a long wait before finally being accepted." -Goethe

Introduction

The first isolation of a virus was achieved in 1892 by Russian bacteria hunter Dimitri Iwanowski, who gathered fluid from diseased tobacco plants. He passed this liquid through a filter fine enough to retain bacteria; yet to Iwanowski's surprise, the bacteria-free filtrate easily made healthy plants sick. In 1898 a Dutch botanist, Martinus Willem Beijerinck, repeating the experiment, also recognized that there was an invisible cause and named the infectious agent "tobacco mosaic virus." In the same year as Beijerinck's report, two German scientists purified a liquid containing filterable viruses that caused foot-and-mouth disease in cattle (viruses were at one time called "filterable viruses," but eventually the term "filterable" came to apply only to viruses, and was dropped). Walter Reed followed in 1901 with a filtrate responsible for yellow fever, and soon dozens of other disease-causing viruses were found.

In 1935 another American, Wendell M. Stanley, went back to the beginning and created pure crystals of tobacco mosaic virus from a filtered liquid solution. He affirmed that these crystals could easily infect plants, and concluded that a virus was not a living organism, since it could be crystallized like salt and yet remain infectious. Subsequently, bacteriologists all over the world began filtering for viruses, and a new area of biology was born-virology.

Historically, medical science has vacillated on the question of whether a virus is alive. Originally it was described as nonliving, but is currently said to be an extremely complex molecule or an extremely simple microorganism, and is usually referred to as a parasite having a cycle of life. (The term "killed" is applied to certain viral vaccines, thus implying an official conviction that viruses live.) Commonly composed of either DNA or RNA cores with protein coverings, and having no inherent reproductive ability, viruses depend upon the host for replication. They must utilize the nucleic acids of living cells they infect to reproduce their proteins (i.e., trick the host into producing them), which are then assembled into new virus particles along an assembly line. Theoretically, this is their only means of infecting new cells or hosts.

Birth of virology-a miscarriage?

Underlying the birth of virology was the doctrine of monomorphism-that all microorganisms (herein called microforms) are fixed species, unchangeable; that each pathological type produces (usually) only one specific disease; that microforms never arise endogenously, i.e., have absolute origin within the host; and that blood and tissues are sterile under healthy conditions. This last point warrants immediate comment. Theoretically, under ideal health conditions the blood might be sterile, though it has the inherent potential to develop morbid microforms, as discussed in the main text of this book. Long and repeated observation of live blood in the phase-contrast, dark-field microscope, however, shows that the blood can contain various microforms in an otherwise asymptomatic host, or in a condition defined as normal or healthy in orthodox terms. The forms are easily visible before other physical symptoms arise. (Since long and repeated observation has correlated their presence with other disease symptoms and their disappearance with the return of health, they serve as indicators of impending outward signs of disease.)

Monomorphism was the cornerstone of developments in 20th-century medical research and treatments. Refusal by the mainstream to examine fairly, much less accept, the demonstrated facts of pleomorphism-that viruses and bacteria (and also yeast and fungi) are evolutions from the microzyma; that microforms can rapidly change their form (evolve and "devolve") in vivo, one becoming another dependent upon conditions in the inner terrain (environment); that blood and tissues are not necessarily sterile; and that there are no specific diseases, but only specific disease conditions-was the foundation of a latter day "Galileo debate." It is so called because those who wore the "robes" of scientific authority, reprising the religious fanatics who punished the noted astronomer for his truths, would not be swayed from folly when presented with its contrary proofs. These proofs began in earnest with Antoine Bechamp in the last century (who also endured the indignation of a fanatical clergy).

In the early third of the 20th century, the heated debate took place between filterable bacteria versus non-filterable. This was a major battle

ウイルス、ワクチン、HIV/AIDS仮説についての再考」のご注文はこちらへ：

<https://phmiracleproducts.com/collections/books-audio-video/products/second-thoughts-about-viruses-vaccines-and-the-hiv-aids-hypothesis-booklet>

Second Thoughts About Viruses, Vaccines, and the HIV/AIDS Hypothesis



Robert O. Young MSc, DSc, PhD

